乱歩賞作家書下しシリーズ

斎藤栄
紙の孔雀

乱歩賞作家書下しシリーズ

斎藤栄
紙の孔雀

講談社

乱歩賞作家書下しシリーズ
紙の孔雀
昭和四十六年四月二十日　第一刷発行

著　者　斎藤　栄
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一
郵便番号　一一二
電話　東京(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社中沢製本所
定　価　三九〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©　斎藤栄　昭和四十六年

Printed in Japan

0393-136541-2253 (0)　(文2)

目次

全学封鎖十一日前……五
全学封鎖十日前……一七
全学封鎖九日前……三六
全学封鎖八日前……五三
全学封鎖七日前……七六
全学封鎖六日前……八三
全学封鎖五日前……八九
全学封鎖三日前……一〇六

全学封鎖の日……一一七
全学封鎖後二日目……一三六
全学封鎖後三日目……一四九
全学封鎖後四日目……一七五
全学封鎖後五日目……一八五
全学封鎖後六日目……二〇七
封鎖解除の日……二一四
日付のない事件……二二九
斎藤栄氏素描　中島河太郎……二四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

紙の孔雀

装画　山本　美智代

全学封鎖十一日前

1

不意に雲がきれた。仲秋の冴えた月が平潟湾の水面(みのも)を照らした。ようやく台風12号の影響が消えかかっているのであろう。風も衰え、時折、月をかすめて飛ぶ黒雲ばかりが物凄く見えた。

午前一時を少し廻った頃、横浜市の最南端、金沢区にある私立横浜港南大学の学生寮に向かって、粛々と進む一団の黒い影があった。

一団はそれぞれ黒っぽい衣服に半長靴、手には長いゲバ棒をにぎっている。共通した点は、一様に真っ黒に塗った武闘ヘルメットを着用して、フードグラスやサングラスで表情を隠し、念の入ったことには手拭のマスクをしていることだ。そのために、誰が誰やら、ほとんど区別がつかない。強いて仔細に観察すれば、薄い着衣の上から、乳房のふくらみや尻の肉付が窺えるので、一団の中に二人ほど女性のいるのが分かる。

野島側から長い夕照橋にさしかかったとき、一団の足は並足から駆足に変った。鋲をうった

靴裏が、規則正しく、カツカツと深夜の空気を震わせた。
「みんな、遅れるな！」
先頭の黒ヘルが、低い鋭い声で叱咤した。どうやらこの男が今夜の隊長らしい。しかし、すっぽり黒ずくめの衣装に身を包み、声さえ含み声に変えているので、昼間、じかに顔を見ても判然とはしないだろう。
一行は隊長のそばに固まった。実のところ、ここに集まった者は全員、隊長が誰であるかを知らないばかりではなく、お互いに名前さえ分からないのだ。
彼等は、全共闘革マル派の学生で、今夜、対立する派閥、社青同解放派を解体するためにその根拠地である学生寮を急襲する途上であった。横浜港南大学のような古い伝統のある大学では、学生運動自体なかなか困難である。それがこの夏以来、やっと活動の緒につき、理事者側に「七項目要求」をつきつけるところまで来た。この際、これを強力に進めるためには、全共闘の一本化が是非とも必要であり、それには社青同解放派を解体しなければならない――これが革マル派の論理だった。
三日前の秘密幹部会で、〝決死隊による夜襲〟を決定した同派は、ただちに志願者をひそかに募った。こうして、今夜――九月二十三日二十三時三十分、決死隊員は指示通りの出立で、国道16号線に沿った龍華寺の庭に結集した。
その人数七名。互いに顔は分からず、名前も確認できないが、隊長と副隊長は自ら名乗り出た。二人とも幹部の一員なのだろうが、そんなことはどうでもよかった。
七名の使命は、室ノ木にある横浜港南大学の学生寮を襲い、社青同解放派の巣を粉砕するの

だ。下手をすれば相手に逮捕される虞れがある。そうした場合、どんなに恐ろしい私刑(リンチ)が待ち受けているか、誰でもよく承知していた。

だから、後日の証拠のためにと、一枚の紙に名前を署名したときは、誰の指先も緊張でコチコチだった。これは一種の連名状だが、最初の人がサインすると、その分だけ紙を折り次へ渡す。次の者も同様にしてサインの名を読まれないようにしたもので、最後は隊長がポケットへしまった。

「ここから人数を二手に分ける……」

行く手に鉄筋コンクリート三階建の目標が、夜空に黒々と浮びあがったとき、隊長は一行に命令した。

「おれとこの二人は寮の裏山から奇襲する。副隊長とほかの三人は、寮の北側の通用門を乗り越えて行く。いいな……」

隊長と行動を共にする[illegible]人は、明らかに女性だった。つまり、隊長は弱点になりやすい隊員を、別働隊に使おうとしているのだ。

「もう一度、確認するが……」

と副隊長が野太い声で言った。背は低いが、デップリと貫禄がある。

「合言葉はZ(ゼット)にN(エヌ)……だったね」

「そうだ」

隊長が答えた。暗夜での争いでは、こうした合言葉が非常に大切である。そのことを、いくどものゲバ騒ぎで、彼等は熟知していた。

「遅くとも一時間後には退去するわけだね……」
「その辺はうまくやれよ」
隊長は副隊長の手をガッシリとにぎった。サングラスの奥で副隊長の目があやしく輝いた。
隊長はうなずき、
「じゃあ……」
と副隊長が応じた。
実際を言うと、七名のうちで、この副隊長だけは薄々、隊員達に正体が分かっていた。背恰好と躰つきに特徴がある闘士で、昼間光治と言えば、横浜港南大学ばかりではなく、東大、日大の学生達でも名前ぐらいは知っている。こうして覆面黒装束をしても、昼間の声は二十一歳の若さにかかわらず野太い。それだけでも誤魔化しきれないのだった。
何かひとつの行為をするにも確認癖があるし、理屈っぽい点があるので、仇名を「先生」と言った。
今夜は、その先生が副隊長を志願しているらしい。
身振りで合図がすむと、黒ヘルの一団は二手に分かれ、たちまち闇の中に吸い込まれてしまった。

2

学生寮の北側通用門に廻った一隊の中には、社会学部二年生の相川四郎と言う青年がまざっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

相川の役目は、頃合を見計らって、学生寮の窓から内部へ強化火炎ビンを投げ込むことだった。彼が持っている三本の強化火炎ビンは、従来のものと違い、ウイスキーの角瓶を利用したヤツで、爆発するときの破壊力が大きい。一種の手榴弾に改良されていた。

相川は副隊長の後ろにピッタリついて、学生寮のブロック塀にたどりついた。腕時計は午前一時四十分をさしている。通用門のあたりには樹木が少なく、一番見通しがいいので、発見される危険がある。

「よし。侵入！」

副隊長が周囲を確かめて号令した。素早く鉄扉にとりつくと、四人のゲバ闘士はなれた身のこなしで、ヒラリヒラリと寮の庭におり立つ。

相川はすぐに次の行動を起こそうとしたが、

「待て！」

と副隊長に呼びとめられた。

「……」

振り向くと、ゲバ棒を宙に構えて、副隊長がコンクリートのビルの窓をさし示していた。

「おかしいぞ。今、あそこの窓でチラッと明かるいものが閃めいた。懐中電灯じゃないのかな……、そうだとまずいぞ」

相川はそのあたりを見たが、灯のない寮の窓にはなんの変哲もない。しかし、今夜の夜襲に関する情報が、相手の耳にはいっていないと言う確証は何もないのだ。

「どうする？　……隊長はそろそろ裏山に着く頃だぜ」

相川はそれが一番気がかりだった。
「まあ、少し様子を見ることにしよう。右へ廻って、裏の状況を調べる」
副隊長は沈着に判断した。この学生寮に社青同解放派がたてこもって、丁度一週間になる。その間に、寮の内部がどんな風に変っているか、副隊長の昼間にも想像できないのだった。
寮にいる敵の中心人物は、理学部四年生の塚田忠信で、留年二回、智力体力共にすぐれた青年である。どんな策をめぐらして、決死隊を待ちうけているか予断は許さなかった。
四つの影は、闇から闇を渡る蝙蝠のように、この「白鷗寮」の裏手へ移動した。
だが、いくらも行かぬうちに、「おっ」と副隊長が足をとめた。相川も、後に続く二人も呆然とした。
夜目にもうず高く積みあげられた机、椅子、スノコ、雑木などのバリケードが、彼等の道を遮断している。これでは裏手に廻り、山側からサカ落しに侵入しようとする隊長達三人は、二進も三進もゆかないだろう。
「こいつは知らなかったな」
相川は舌うちした。
「これは民青の逆バリケードだ。奴等のじゃない」
副隊長が呻いた。解放派の動向にはスパイを放って調査をしている。それに基づいて今夜の計画を練って来たのだ。ところが、自治会を牛耳る民青系の動きには、余り注意を払わなかった。とんだところで、計画にヒビがはいったことになる。
「どうしますか？」

最初から寡黙な男が、黒ヘルを少しアミダにしながら訊いた。
「予定どおり決行する。そのための決死隊だ。たとえどうなろうとも、おれ達はお互いを知らない。それぞれ自由にやってくれ……」
副隊長の決断は早かった。所詮、矢は弦を離れている。今夜を除いて、適当なチャンスがあろうとは思えない。
三人の隊員は大きくうなずいて、了解の意思表示をした。遅くなって午前二時半が近づくと、警官のパトロールが始まる。そうなっては、「白鷗寮」からの脱出に支障が生じる。
「じゃ、行ってくる」
相川はスタスタと一人だけ離れ、大胆にも月光に照らし出された寮に近寄った。その腰には重そうな三本の角瓶がブラさがっている。彼は二度と仲間の方を見ようとはしなかった。
カーテンを閉めた窓は、死んだように静まりかえっている。その下にしゃがみこんだ相川は、まず一本の角瓶を手にし、点火装置に異常がないかどうかを調べた。
この瞬間だった。
ビシッ、と金属のはじける音がして、相川の左腕でガラスが割れた。何か固い物体が時計の表面に命中したのである。
〈畜生！　……空気銃だな〉
相川が勘づいて、パッと地面へ身を伏せたとき、続けて、シュッ、シュッと二発の空気銃弾が飛来した。どこから撃ってくるのか、皆目見当がつかない。しかも、この調子では二、三挺の銃器が用意してあるらしい。

相川は下水の溝に身を横たえた。左腕を闇に透かすと、皮膚が破れ、血がしたたっている。
〈気どられてしまったんだな。すると、あの作戦もうまくはゆかないだろう……〉
彼は隊長と副隊長のことを、チラッと考えた。
そして、ガバと身を起こすと、再び火炎ビンのある場所に戻り、その一本を右手で逆につかんだ。こう摑んで投げれば、自動的に点火、爆発する仕掛になっている。二、三歩、駈け寄るようにして投げた。
窓ガラスが砕けた。冴えた音が夜空に響いた。ボワーッと赤い火が燃えあがり、一瞬、あたりが明かるくなった。
〈やったぞ〉
次の火炎ビンを、と思い、相川がかがみこんだのと同時に、シューッと消火器から迸る消火剤の音がして、燃えあがったばかりの火が、たちまち下火に変った。
内部の消火準備も万全な様子だ。
〈なにくそ!〉
第二弾を投げ込もうと構えたとき、バラバラッと駈け寄る黒い影が見えた。
〈残念だ。いったん引きあげるより仕方がない〉
そう判断した相川四郎は地上からゲバ棒を拾いあげ、侵入して来た通用門を目ざして駈け出した。
「こっちだぞ!」
追っ手の声がする。ハッとして前方に目を凝らすと、月光に浮びあがった人影は七、八人。

一列に竹竿を構えて、相川の退路を遮断している。
〈しまった……〉
通用門以外は高いブロック塀である。乗り越えるのは不可能ではないが、そんなことをしていれば竹竿やゲバ棒で叩き伏せられるにきまっている。
相川は右手に握っていた火炎ビンを、敵の集団のど真ん中へ投げ込んだ。
激しい音と共に、パーッと火が燃え拡がり、追っ手の多彩なジャンパーの色を闇に浮びあがらせた。
相手のひるむ瞬間に、相川は駿足で突っ切ろうとした。が、即座に、四、五本のゲバ棒が相川の向こう臑を掻っ払った。彼はもんどり打って転倒した。その上を、容赦なく痛打が見舞った。顔面を一撃されたとき、ツーと鼻血の湧き出すのが分かった。〈やられた〉と相川は観念した。

3

主力の攻撃が失敗した頃、裏山に廻った別働隊も、手きびしい報復を受けていた。
「白鷗寮」の位置を正確に記すとこうなる。東側、野島に面する部分は、六メートル道路に沿ったブロック塀。北は通用門があり、南に正門が重い鉄柵を閉じている。ところが、西側一ぱいは寮の敷地が崖の下まで続き、そこにこんもりした丘陵が残っていた。
隊長と二人の女子隊員は、この丘陵を登り、義経の「ひよどり越え」のように敵の背面をつく予定であった。

けれども、攻撃開始後二十分したとき、女子隊員の一人、商学部三年生の新関洋子は、やっとの思いで敵の重囲を切り開き、丘の茂みに逃げ込んでいた。

洋子は陽動作戦を担当したのだ。それだけに相手に発見されるのも早かった。屈強な二人の敵に左右から挟撃された。それは一足先に彼女一人が寮の内庭に忍び込んだためである。右から襲いかかった男には、火炎ビンを浴せた。が、左から来た長身の学生は、二メートルものゲバ棒を、ナギナタのように振り廻して来た。洋子は闇くもではあったが、捨身の突きを相手の顔に叩き込んだ。それが利いたらしい。ひるむ隙に、元来た丘に這い登った。だが、途中、足をすべらして、二メートルほどの窪地へ転落した。そのとき、右足首を骨折したとみえる。とても痛くて歩けないのだ。ズンズンと、響くような激痛がアタマのシンへのぼってくる。

〈イタイ……イタイ……〉

洋子は闇をよいことにして、手放しで泣いた。後悔の気持がかすかに心をよぎった。

〈隊長とあの女はどうしたかしら?〉

彼女の活躍で、残った二人は無事だったはずである。

遠くで人の叫ぶ声がきこえた。

突然、目の前にパッと電灯が輝いた。

洋子は光の輪を避けながら、敵か味方かを判断しようと試みた。

「どうした……立てないのか?」

その声は隊長だった。

「右の足首をくじいちゃったわ。骨折したかもしれない。痛くて……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.